伝統を意識したデザインについての研究

～日本の伝統的文様・伝統色を知ることから～

千葉県立　○○○○　高等学校　○○　○○（芸術科　美術）

１　はじめに

新学習指導要領の改善の基本方針の中に「美術文化の継承と創造への関心を高めるために，作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や，我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する」とある。

現在の勤務校においては，鑑賞の授業として取り上げてみても日本の伝統的な文化や美術に対しての関心を高めることは難しい。説明中，こちらが知っていると思っているちょっとした事柄も生徒は案外分かっていないことが多く，まずそれについて少し説明をしてから・・・といったことになってしまうのである。

昔は，地域や祖父母，高齢者，家族から自然と伝えられていたような事柄も，現代の社会においては伝承されていないことが多くある。子どもたちは日常生活において直接的に関わりのないことは教わる機会がほとんどないのが実情である。そんな生徒たちに，知らなくても困ることはないが，知っていることによってものの見方が変わることや自分の世界が広がることを体験させたいと考えた。それは，美術や伝統文化に限らずあらゆることに通用する「学ぶ理由」だと考える。

身近な文化を紹介し，知識を広めること「知ること」から日本の伝統文化に興味・関心を持たせ，身近な物のデザインとして取り入れ自分で描く体験を通して，知識をより確かなものとし，生活を豊かに楽しむ下地を身に付けさせる。その一例として本実践を報告したい。

２　教育課程と生徒の現状

今年度本校では，芸術は音楽・書道・美術の３科目で第１学年７クラス・４講座，第２学年６クラス・３講座で展開している。芸術Ⅰ・Ⅱ（各２単位，計４単位）を１，２年次に継続履修し，３年次に全クラスから芸術Ⅲ（２単位）を選択（継続）で履修することができる。

芸術選択の決定に当たっては，基本的には生徒の第１希望を優先することにしているが，３科目が平均的な人数になるように調整している。例年，全体の３割程度の生徒が第２希望の科目を履修している状況である。

１年次の初めに中学時代の美術の取り組みについてのアンケートを実施しているが，３年間必修で履修しているにも関わらず何をやったか覚えておらず，未記入欄の多い生徒やいくつもの作品が未完成のまま終わっているといった経験値の低いと思われる生徒が大半を占めている。

３　授業実践　「和菓子をデザインする」（１年次３学期に実施）

日本の美しい四季を取り入れた和菓子をデザインする。諸外国に誇れる「食の芸術品」とし

ての和菓子のデザインを考える。旬や季節を取り入れた和菓子をデザインすることを通して，季節の旬や伝統文化，年中行事を知るとともに，四季を楽しみ，季節や風情を大切にする日本文化を見直し，日本の美意識について考察する。

（１）身近な文化を知る

身近な物との関わりを感じさせるために，事前学習として，本校生徒の生活の中での日本文化について知識を確認し，四季や旬，年中行事などについて考えさせながら進めることとした。知ってほしいこと，考えてほしいこと，感じてほしいことは何かを考えながら確認作業を進めた。

ア　干支について

近年の高校生はメールが中心となり，年の初めの挨拶である年賀状をあまり書かなくなっているようである。本校では２０１２年が辰年だということも知らない生徒もおり，プリントを使って十二支を順番に読み，漢字・絵を描かせて知識の確認を行った(図１)。

結果・・・「ね」という音からか，猫を描く生徒がいたり，空欄が多くある生徒もいた。クラスによっては，空欄で提出するのが嫌なのか，周り周りの生徒に聞いたり相談して記入をする姿が見られた。

図１　干支を描く

イ　年中行事や季節

陰暦の１月から１２月の読みと漢字を書く。任意で二つ月を選び，その月の行事・自然・季節・旬のものについて記入させた。旧暦で表現することによって，言葉の音の美しさを味わい，その文字や音の響きから季節を想像することができる。年中行事や旬については，家庭での行事への取組が減っていたり，スーパーでは多くの食材が旬の時期以外でも販売されており，旬を感じる機会が減っている。何が旬なのかわからないという生徒も多くいると思われるため学習の必要性を感じた。家庭科との連携も考えたが本校は，１年次には家庭科の履修がなく，２・３年での履修となっているため，まずは美術で取り上げることにした。

旬以外でも風の名前（花風・薫風・風花・野分・黒南風・涼風）や月の名前（立待月・居待月・寝待月・更待月・晦）なども取り上げ，季節を楽しむ日本の感覚について感じさせるように努めた。

ウ　季節について

春・夏・秋・冬より季節を一つ選び，関連すると思うものや事柄を３０個書かせる連想ゲーム的な課題を行う。出てきた言葉は，和菓子を考える際のヒントやキーワードとなる。出てきたキーワードの中から人とは違うものを積極的に取り上げ，更にイメージを広げさせることによって，単純な発想で終わらせる事がなくなる。制作にとらわれずに考えられるため，視野を広げて各自の気づきに結びつけることができ，人と同じモチーフ（春→桜）になることを減らす効果が期待できる。

エ　生徒の感想

・陰暦全部覚えたはずなのにもう忘れていました。
・自分は知っていると思っていたが知らないことが多かった。きちんと覚えたい。
・思ったより自分が日本の文化を知れていないなーと実感しました。
・美術なのにものすごく頭を使って疲れた。
・日本人なのに覚えていなくて恥ずかしさが沸いた。
・干支の漢字をあまり知らなかったし，陰暦もあまり知らなかったのでもっと知れるようにしていきたいです。
・その月のことについてよく知れておもしろかった。
・春は植物ばっかりだと思った。（夏はいろいろなことや物が多かった。）
・干支も陰暦も難しくて，もっと日本文化に関心を持とうと思いました。
・３０個出なかった。
・日本人は自国の民族衣装（着物）を着ることができない人が多いという事実はざんねんです。また，そのための教室（着付け教室）があるのは日本くらいだという話に，自分もきちんと着れるようになりたいと思いました。

結果・・・確認作業によって，各自の知識レベルがあぶりだされ，「知りたい」「覚えたい」といった文化を知ることに前向きな感想が多く，導入としての成果があった。

（２）和菓子をデザインする

ア　デザイン画の制作

これまでの学習プリントを基に二月の和菓子と任意の月の２パターンを考え，描かせた。当初，任意の２か月を考えていたが，制作時期がちょうど二月で，プリントの学習だけでなく，日々の生活の中で題材を見つけようと自主的に動き，季節を直に感じて制作してほしいと考え，二月を指定した。

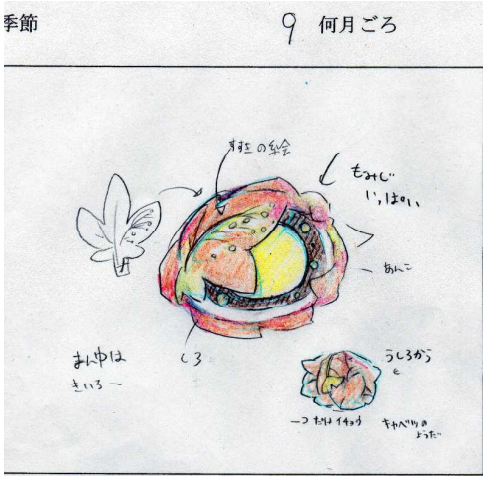


図２　和菓子のデザイン９月

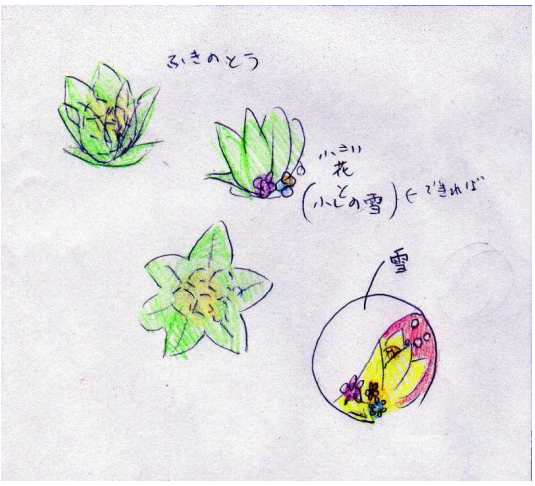


図３　和菓子のデザイン２月

イ　粘土でサンプルを制作する

デザイン画を基に和菓子のサイズ（実物大）で模型２作品（二月と任意月の和菓子）を制作する。そのうち「おすすめの１作品」について用意したカードにコメントを記入させる。材料は，軽量粘土ハーティクレイ（図４）（白・黒・黄・青・赤・マゼンタ）を使用する。

白にカラー粘土を練り込むことで，さまざまな色を作ることができ，混色の学習になる。

そのため，茶色やオレンジ，紫，緑なども販売しているが，本校ではそれらの色は購入せず，最小限の色にとどめ，生徒に作らせるようにしている。なかなか思い通りの色にならず試行錯誤を繰り返すため，無駄になる分も多く，割高だが，紙粘土と違う滑らかな触り心地と色を作ることを楽しめるため，生徒の反応は良い。粘土のほかに，ゼリーのような表面に仕上げるための艶出しとパーツの接着に木工用ボンドを使用した。

図４　ハーティクレイ

一度に沢山つけると内部がいつまでも白く乾かないので，何回かに分けて塗ると良いようである。

絵の具で着彩することもできるが，今回は時間の都合で着彩する生徒は数名と少なかった。

図５

図６　梅に鶯

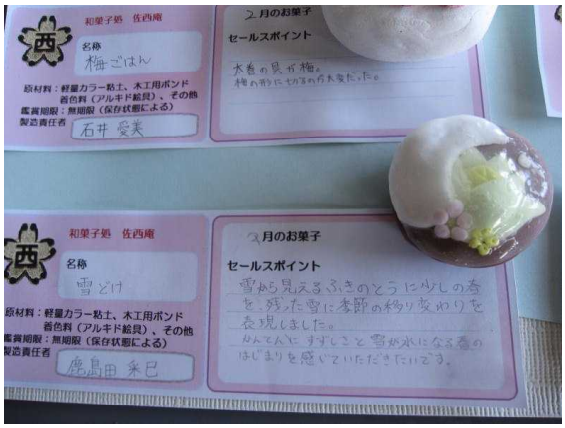


図７　ボンドを使った作例

図８　花の中心に着彩を施した作例

ウ　生徒の感想

・季節とおかしを結びつけるのが思ったより難しくて大変でした。
・自分がイメージしたのとは違ったけれど，とても気に入った作品ができてよかった。
・色を混ぜるのが難しかった。花はもう少し薄くきれいに作りたかった。
・和菓子という小さな世界は細かい作業が多くてとても苦労しました。
・二月って本当に何もなくて考えるのが大変でした。

・粘土で何かを作るのはすごく楽しかった。何と何を混ぜると何色になるのかよくわかった。
・色が濃いと毒々しく何度もやり直してたいへんだった。
・「春風」というタイトルにした。風にも季節や名前があると知り，デザインにもなるのが面白かった
・グラデーションをうまくつけてもうちょっと「風」の感じがうまく出せればよかった。
・形は思い通りにいったが，色が濃くて「アメリカのお菓子」みたいになってしまった。
・佐倉市（井野）の伝統文化？の「辻斬り」をデザインしたのがうまくできた。売っている物みたいにできたと思う（図９）。

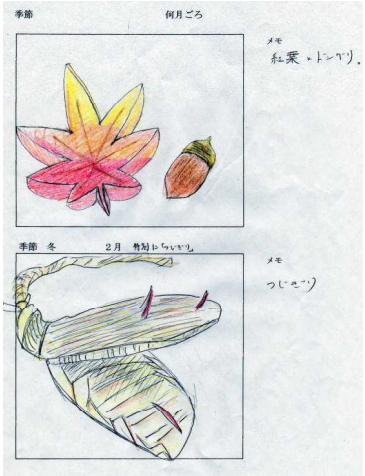


図９　地域の行事「辻斬り」を取り入れたデザイン

図１０　辻斬り

辻斬り・・佐倉市の北西部にある井野という地区に伝えられている行事。毎年１月 25 日に藁でつくった大きな蛇を村境の木の上に取りつけ睨をきかせ，災疫や疫病などが外部から侵入するのを遮ることを目的とした民俗行事で，蛇には大小２つの大きさのものをつくる。小蛇は９尺ほどの長さで各戸の戸口に掛け，大蛇は全長２間半ほどのものを村境に掛ける。大蛇の頭部には和紙に炒った五穀を包み，５ cm ほどの径にしたものに墨で黒目を入れて目玉とし，大きく裂けた口に唐辛子で舌を作る。県内でも蛇を掛ける辻ぎりは，井野のほか数カ所に伝わるだけで，重要な伝統行事となっている。当該地区の中学校の中には，地域の伝統行事を継承するために辻斬りの講習会を開き，生徒に作り方を学ばせているところがある。

結果・・・ 生徒たちは和菓子のデザインを通して，日本の四季，季節の行事や地元の文化を知り，先人たちの培った日本の美意識について考える経験ができた。

ポップな配色と和の配色の違いを感じ，物だけでなく風や香り，音でさえもデザインの基となり得ることを体験した。日本文化に関する知識を確認し，身近な日本文化を知り，自分の体験や経験，感覚を呼び起こし，自分の中にある日本の美意識を確認できたのではないかと考える。

４　授業実践２「伝統的な文様を使った平面構成」～ファイルのデザイン～

日本の伝統的な文様について学習し，それを取り入れファイルの表紙をデザインする。学習したことを活かし，デザインに取り入れることで，より理解を深めることができる。自分がデザインしたものを生活の中に取り入れることによって，日本の伝統文化をより身近に楽しむことができる。

（１）日本文化を活用する

ア　伝統文様についての学習

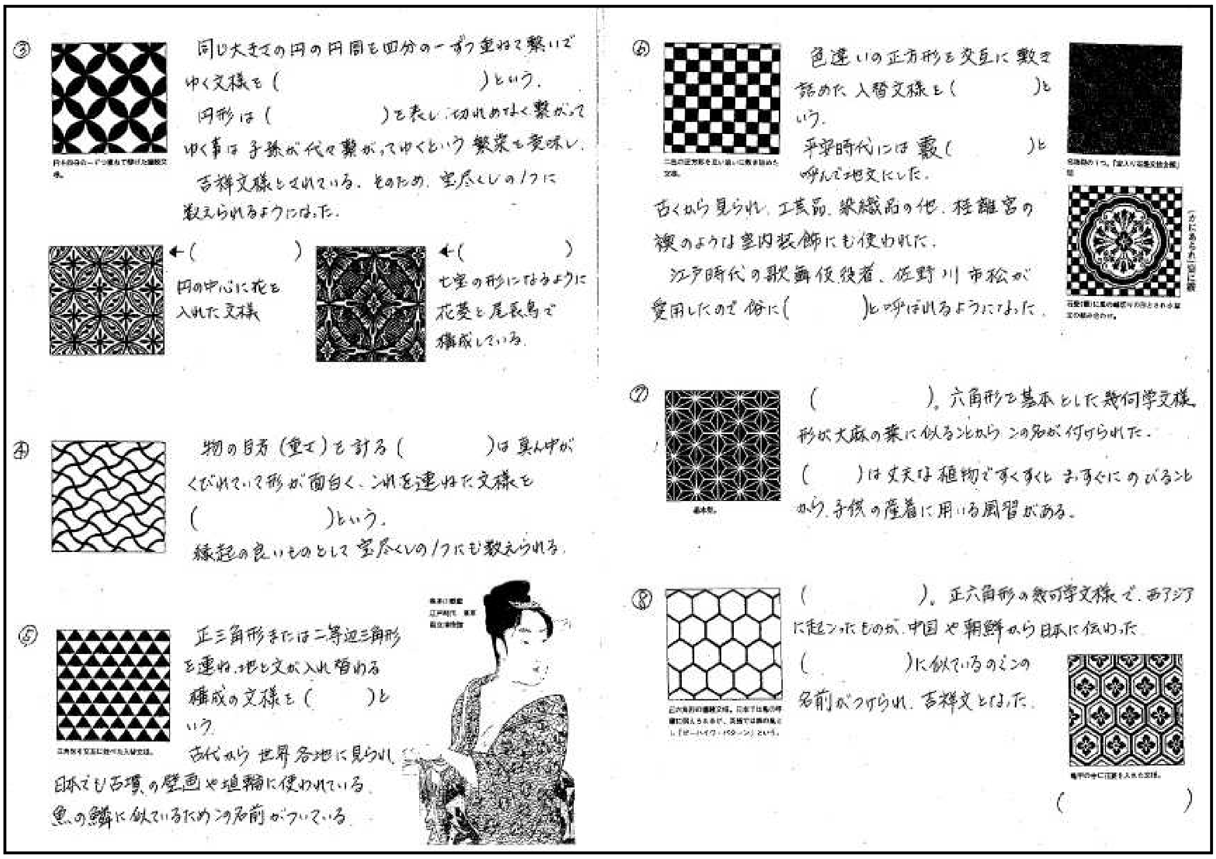
プリントを使用し，いくつかの文様について知ることから始める。青海波や市松模様，麻の葉，亀甲など馴染みのありそうなものや松皮菱，立涌，卍崩しなどネーミングやデザインなどに面白みのあるもの，浮世絵に登場するものなどいくつか選び，名前や由来，使われ始めた時期などについて板書し，プリントにまとめる形で学習を進めた。また，文様のバリエーションを広げるために編み出された，「繋ぎ」「崩し」「破れ」などの用語についても学習し，デザインに活用できるようにした（資料１・２）。

〇佐倉市指定の有形文化財

佐倉市の秋祭は，毎年１０月に行われ，そこで曳き回される山車や山車人形は明治時代に江戸から購入されたもので，佐倉指定の有形文化財となっている。各町内によって大切に保存され 100 年以上の時を越えて江戸の文化を感じることができる。江戸時代に庶民の間で流行した能に登場するものを題材とした人形が多く，その着物には様々な文様が施されている。本校生徒の多くが楽しみにし，子供のころから慣れ親しんでいる祭りにも伝統的な文様が使われているというところから，伝統的な文様をより身近に感じるきっかけとなると考えた。また，祭りに興味のない生徒や佐倉市在住でない生徒にも文化財に見られる文様に魅力を感じ，興味，関心を持って，地域の文化財を大切にする気持ちを養いたいと考え授業で取り上げた。

図１１　山車にみられる文様（上）
亀甲花菱の文様の着物を着た竹生島龍神（左）

資料１



③ 同じ大きさの円の円周を四分の一ずつ重ねて繋いでゆく文様を（　　　　）という。
円形は（　　　　）を表し、切れめなく繋がってゆく事は子孫が代々繋がってゆくという繁栄を意味し、吉祥文様とされている。そのため、宝尽くしの1つに数えられるようになった。

←（　　　　）円の中心に花を入れた文様

←（　　　　）七宝の形になるように花菱と尾長鳥で構成している。

④ 物の目方（重さ）を計る（　　　　）は真ん中がくびれていて形が面白く、これを連ねた文様を（　　　　）という。
縁起の良いものとして宝尽くしの1つにも数えられる。

⑤ 正三角形または二等辺三角形を連ね、地と文が入れ替わる構成の文様を（　　）という。
古代から世界各地に見られ、日本でも古墳の壁画や埴輪に使われている。
魚の鱗に似ているためこの名前がついている。

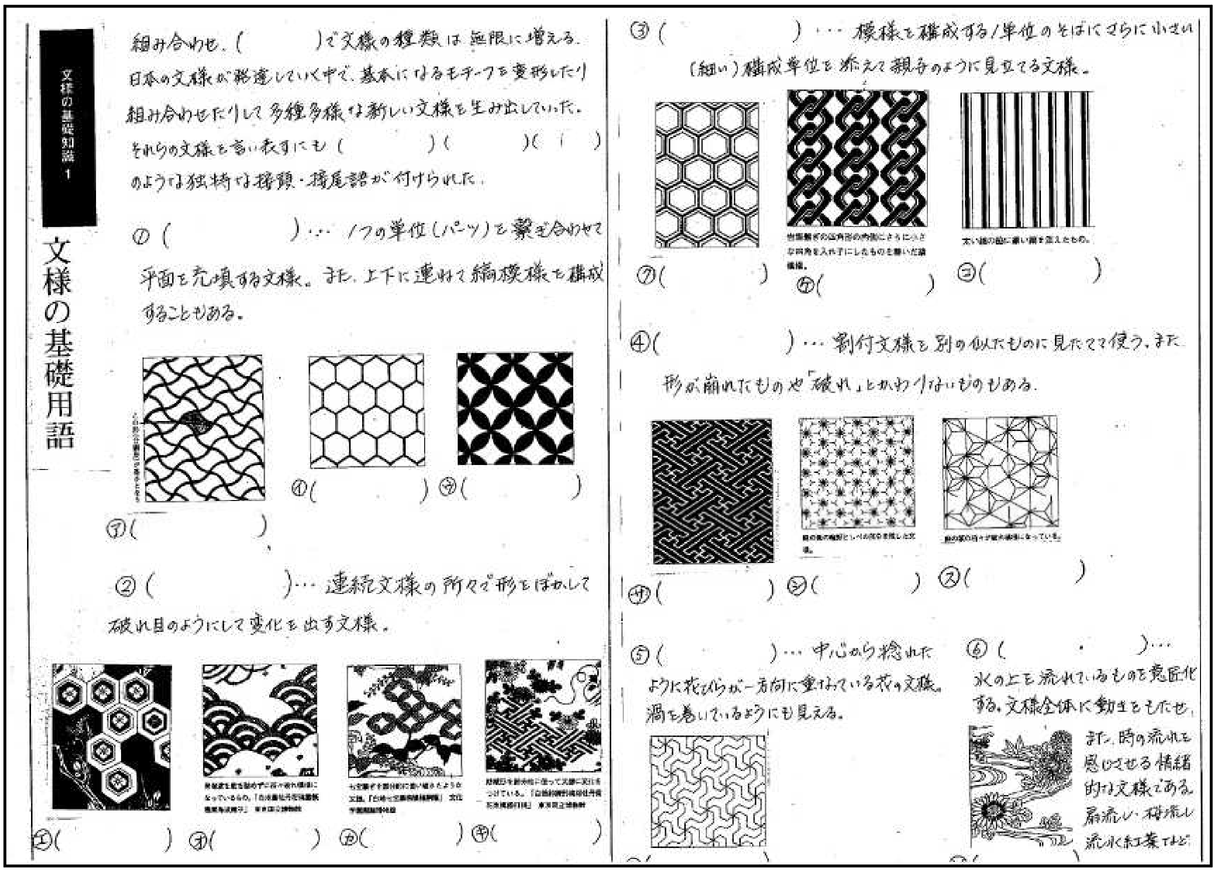
⑥ 色違いの正方形を交互に敷き詰めた入替文様を（　　　）という。
平安時代には霰（　　　）と呼んで地文にした。
古くから見られ、工芸品、染織品の他、桂離宮の襖のような室内装飾にも使われた。
江戸時代の歌舞伎役者、佐野川市松が愛用したので俗に（　　　）と呼ばれるようになった。

⑦ （　　　　）。六角形を基本とした幾何学文様。形が大麻の葉に似ることからこの名が付けられた。
（　　）は丈夫な植物ですくすくとまっすぐにのびることから、子供の産着に用いる風習がある。

⑧ （　　　　）。正六角形の幾何学文様で、西アジアに起こったものが、中国や朝鮮から日本に伝わった。
（　　　　）に似ているのでこの名前がつけられ、吉祥文となった。

（　　　　）

資料２



文様の基礎知識1

文様の基礎用語

組み合わせ、（　　　）で文様の種類は無限に増える。
日本の文様が発達していく中で、基本になるモチーフを変形したり組み合わせたりして多種多様な新しい文様を生み出していった。
それらの文様を言い表すにも（　　　）（　　　）（　　　）のような独特な接頭・接尾語が付けられた。

①（　　　　）…1つの単位（パーツ）を繋ぎ合わせて平面を充填する文様。また、上下に連ねて縞模様を構成することもある。

㋐（　　　）　㋑（　　　）　㋒（　　　）

②（　　　　）…連続文様の所々で形をぼかして破れ目のようにして変化を出す文様。

㋓（　　　）　㋔（　　　）　㋕（　　　）　㋖（　　　）

③（　　　　）…模様を構成する1単位のそばにさらに小さい（細い）構成単位を添えて親子のように見立てる文様。

㋗（　　　）　㋘（　　　）　㋙（　　　）

④（　　　　）…割付文様を別の似たものに見たてて使う。また、形が崩れたものや「破れ」とかわりないものもある。

㋚（　　　）　㋛（　　　）　㋜（　　　）

⑤（　　　　）…中心から捻れたように花びらが一方向に重なっている花の文様。渦を巻いているようにも見える。

⑥（　　　　）…水の上を流れているものを意匠化する。文様全体に動きをもたせ、また、時の流れを感じさせる情緒的な文様である。扇流し・桜流し・流水紅葉など。

イ　文様の学習を終えた生徒の感想

・全く知らない文様ばかりでした。日本の文様はたくさんあるんだなと思いました。

・２回目は，前回の文様に変形などの変化を加えたもので面白かった。

・(プリントの）絵（浮世絵）をいろいろ見てかっこいいなーと思った。

・文様にはあまり興味が涌かないかな～と思っていたけど，「これいい！」と感じる文様を見つけられました。

・簡単な図でも合わせれば複雑になるんだと思った。

・文様を生んだ人ってセンスありすぎ。「和」って感じがしていいと思った。

・これも日本なの？という文様があってびっくりしました。普通にかわいいのがあったのも驚きました。どうせ日本・・・とか思っていたのがばかみたいです。

結果・・・工芸を教えてきた自分にとってはなじみの深いものが多く，市松模様や麻の葉など生活の中にも見られ，生徒が知っていそうなものについては，発問しながら授業を進めてみたが，生徒はこちらが思っている以上に文様について知識がなかった。それでも学習後には「文様や変形などに興味を持った」「面白い」「かっこいい」といった好意的な感想が多くみられた。また，プリントに載せた浮世絵に興味を持つ生徒や今回の課題に対する自分の考えが良いほうに裏切られ，日本の伝統的な文様の美しさを受け入れる姿勢がみられた。文様という新しい切り口を持って，日本の文化や芸術に興味，関心が高まったことがうかがえる。学習後に浮世絵や伝統工芸品の鑑賞などをするのも面白いと思う。

（２）表紙をデザインする

ア　デザイン画の制作

日本の伝統的な文様を取り入れたデザインを考える。

支持体となるＡ４ファイルの大きさと，横描きをなくす理由から，画面は２２㎝四方の正方形とした。当初全て手描きと考えていたが，紗綾形や卍崩しなど難しい文様を避ける傾向が見られたので文様集をコピーし，手描きに加え切り貼りも活用した。

コンパスで簡単に描ける亀甲や七宝文様もコピーを欲しがる生徒がおり，正六角形を描くためにコンパスの使い方についても指導を要した。コピーは，日本の文様集１・２・３巻の中から生徒の希望するものを拡大，縮小等して活用した。コピーの切り貼りを活用することによって，視覚的に見て検討を重ねることが可能となった。切り貼りに何を描き加えるかで，オリジナリティを高める工夫ができる。絞りや縞などの文様を描き込んだり，具体的な絵柄（洋風な絵柄や和風の絵柄）と組み合わせるなど取り入れさせた。コピーを活用することによって絵や図を描くことに苦手意識を持つ生徒も配置や取り入れ方を工夫することでデザインを考え，愛着を持ってデザインに取り組む様子が見られた。

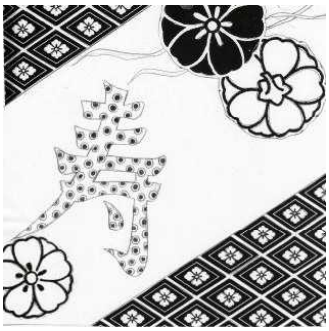


図１２

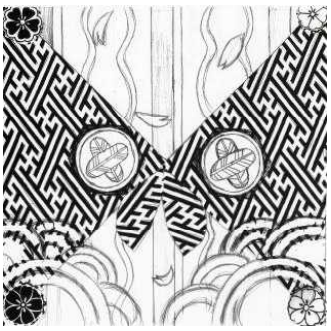


図１３

図１４

イ　日本の色についての学習と色彩計画

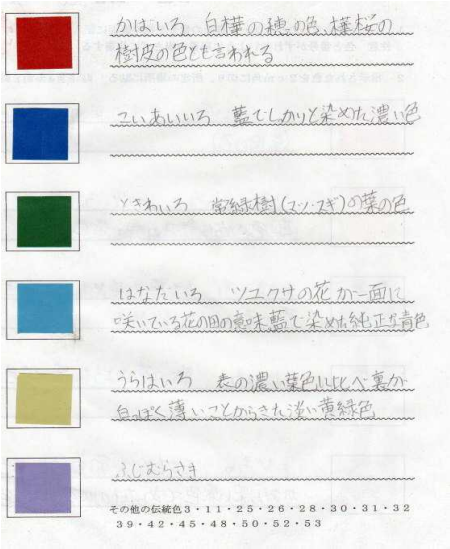


図１５　日本の色の学習

日本の伝統的な色についての学習を考えた時，生徒に色を見せる方法に工夫を要した。１講座３０人の生徒に一度に正しい色を見せ学習する方法は？と考えた。色紙を黒板に貼って説明することも考えたが，本校の生徒には説明だけでなく，目と手を使って確認をさせたいと考えている。プリントに板書を写させたいが，説明だけ写しても色そのものが添付していなければ後で見返しても分からないと考えた。ひとりひとりの手元に残って，色彩計画の際には見返すことができるような資料を考えトーナルカラーを思いついた（図１５）。まず，トーナルカラーのパッケージ裏面にある色の表を見ながら，上から順に番号を振り，プリントに指示された番号の色を四角く切って貼っていく。そして，生徒に貼らせた日本の色について板書し，プリントに写させることで，１０色ではあるが日本の色についての知識を深め，興味を持つきっかけとした。１１色目は日本の色の中から自分の好きな色を１つ貼らせ，作業の中で他の色も目にする機会を作った。山吹色や藤色などなじみのある想像のつくものや樺色（白樺の穂の色），花田色（つゆ草の花が一面に咲いている田の意味），裏葉色など，日本らしいネーミング，ユーモアのあるものを選んだ。重色目（かさねのいろめ）などの配色も参考に紹介した。

色彩計画については，前年度実施した和菓子のデザインの色についての感想について触れ，日本的な色や，配色について考えさせた。

ウ　色鉛筆を使い色彩計画を立る

図１６

図１７

どこの学校でも同様と思うが，いきなり絵の具で好きなように塗らせてしまうと，「ここはこの色じゃないほうが良かった」といった後悔の声が多くなる。めんどくさいという声も生徒にはあるが，配色について想像できない生徒が多いため，ひと手間かけ，色鉛筆でおおまかな配色を塗らせるようにしている。

絵の具ほどの自由度はないが，視覚的に見て分かるので，配色を変えたり，考え直したりして後悔の声を減らすことに役立っている。しかし，今回のコピーを使ったデザインは，黒く塗りつぶされている部分があるため，そのままコピーをしても色鉛筆では塗れない。また，サイズが大きいと時間がかかり，生徒が飽きてしまう。そこでまず，原稿をファイル中央にカーボン紙で輪郭線のみ転写させる。どうせファイルに一度は転写しなければならないので，生徒は嫌がらずに転写し，そのファイルを縮小コピーすれば，線描きで小さく，自由に色を塗ることができる。エの学習で作ったプリントとトーナルカラーを見ながら日本的な配色を意識させた。

エ　アクリル絵の具で着彩をして仕上げる

色鉛筆での計画を参考に，アクリル絵の具を使い着彩をする。今回の色の学習で学んだ日本の色を作品に取り入れたいという生徒が多かったが，アクリル絵の具のセットに学習した裏葉色や藤色のチューブはなく，混色が不可欠である。本校の美術選択者は，入学時のアンケートにおいて，半数近くの生徒が絵具を使った制作（水彩画・デザイン画・ポスターなど）の経験が少ないと回答している。しかし，今回授業を実施した徒たちは，１年次に白井高校の吉岡先生が前年度研究発表された中にある「混色を試そう・絵の具のセット１２色をそれぞれ混ぜるとどんな色になるのか」という課題をやっており，混色についてある程度体験していることもあり，混色に抵抗が少なく，試行錯誤しながらも目的の色に近い色を作っては塗っている様子がうかがえた。また，和菓子制作の際の粘土の混色経験も大いに役立っており，目的の色を元に予想を立て，少しずつ絵具を加えていた。

図１８

図１９　子持ち吉原を中心に

図２０　卍崩しを手描き

図２１　三枡文と七宝

図２２　破れ青海波

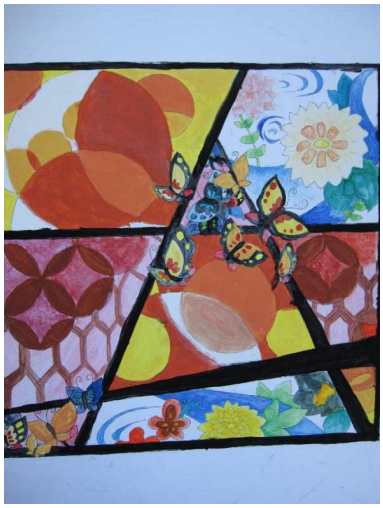


図２３　画面を分割し，
蝶を取り入れた作品

５　題材の評価基準

	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	・日本の美術や文化に関心を持ち，文様を取り入れたファイル制作に主体的・意欲的に取り組もうとする。	・文様のよさや美しさを感じとり，感性を働かせて表現を工夫することができる。	・デザイン制作のための基礎的な技能や色彩を効果的に表現する技術を身につけている。	・伝統文様を通して浮世絵や文様文化について理解し，そのよさや美しさを味わうことができる。 ・人の作品や自分の作品のよさや美しさを見つけることができる。
学習活動における具体の評価規準	・日本の伝統文様のよさや美しさに関心を持っている。 ・文様を取り入れたデザイン構成や着彩に意欲的・主体的に取り組んでいる。	・文様の特徴や美しさに気づきデザインに活かすことができる。 ・文様の面白さを感受し，配置や配色，組合せを工夫しようとしている。	・文様の特徴を生かし，効果的なデザイン表現をしている。 ・目的に合った効果的な配色を考え制作をしている。	・日本の文様や配色について理解し，自分の感想や考えとしてまとめることができる。 ・自他の作品のよさや表現の工夫などを感じとり，鑑賞することができる。

６　成果と課題

日本的なものをデザインする事を目的として，そこに繋がる日本の美意識や伝統文化を学習することに制作と同程度のかなりの時間を割いた。そのため制作時間が押してしまい，予定より長い課題となってしまった。毎回，導入において「知ること」から始めたが，結果，本校生徒は日本の文様，色について少なからず興味を示した。学力的に決して高くない本校生徒達だが，今回の実践で身近な日本の文化・伝統を知ることや学習することを「面白い」と感じている。また，「ちゃんと知りたい」「きちんと覚えたい」など自国の文化をきちんと理解している大人になりたいという気持ちを彼らなりの言葉で記しているように思う。そこには，知ることを通して日本の美や文化に対する意識が芽生え，自分の持っている日本の美意識（共感できる感覚）に気づき，歴史的な価値だけでなく，自分の感覚・価値観で日本の伝統文化のよさを理解し始めた生徒の姿がみえる。

上記のことから，身近な文化を紹介し，知識を広めること「知ること」から日本の伝統文化に興味・関心を持たせ，身近な物のデザインとして取り入れ自分で描く体験を通して，知識をより確かなものとし，生活を豊かに楽しむ下地を身に付けさせるという本研究の目的は達成できたと考える。これからも生徒たちは，生活の中にある美しい日本文化を身近に感じ，大切にしてくれることと思う。

本校に着任して３年になるが，本校以前はずっと工芸を教えてきた。この３年間は，いろいろな先生に課題を教えてもらい，「借り暮らし」で何とかやってきた。今回の研究を機会に初めて自分で授業課題を考えたので，改善点・課題は多くある。導入的な時間と制作時間のバラ

ンスやビデオなどの視覚的な教材の活用，制作時間短縮のためのサイズの縮小化。また，着彩に関しても，デザインの段階のシャープさが着彩によって失われてしまい，うまく塗れないと嘆く生徒が多いのも解決できたらと思う課題である。今回は，デザインでファイルの表紙絵の制作であったが，春に都内の美術館で観た型紙の美しさに染物や切り紙への展開も悪くないと感じた。制作終了後は，浮世絵やジャポニズムなど関連する美術作品の鑑賞授業へつなげることも考えている。

7　おわりに

先入観やなんの情報も持たずに，自分の感覚で美術を楽しむという楽しみ方がある。反面，「知っている」という楽しみ方もあっていいと思う。自分が面白いと思っていることや知っていることを誰かに教えるとき，人はちょっとした優越感を持って誇らしく話すものである。

知る楽しみは学ぶ楽しみである。ネットで検索することが容易になった今，様々な情報・知識を手に入れることはたやすい。しかし，あくまでも検索する本人が調べてみようと思った情報に尽きる。ちょっと知っている知識を切り口に，コミニュケーションを広げ，ものの見方を広げていく。違うことも知りたくなる，本物が見たくなる・・・そんな風に授業を通して生徒の世界を広げていくことができたらと考える。「世界に飛び出せ佐倉西！」というキャッチコピーの本校の生徒に，自国の文化に興味を持って，何か少しでも知識を持ってもらえたらと思い本研究を実施した。

和菓子から茶道や華道，文様から浮世絵や着物，地域の祭りの山車や工芸品，日本文化からジャポニズムや西洋文化に・・・今回の試みを通して，生徒達の自国の文化を見る目を育み，自分の立っている足元を誇らしく語れるように育ってほしいと考える。

「和風もいいものですね」というなにげない生徒の言葉にその種を撒くことができた気がしている。

参考文献・資料

日本・中国の文様事典（視覚デザイン研究所）
日本の文様集　１・２・３巻　（誠文堂新光社）
とりあわせを楽しむ日本の色（平凡社）
ＫＡＴＡＧＡＭＩ　Ｓｔｙｌｅ（三菱１号館美術館　図録）
おうちで楽しむにほんの行事　広田千悦子　著　（技術評論社）
http://www.sakura-maturi.jp/　佐倉の秋祭りホームページ